

——本日は貴重な時間を頂きまして誠に有りがとうございました。

既に御存知のとおり、都南村の盛岡合併にともない、平成六年度から稗貫紫波歯科医師会会員で都南村在住の先生方が盛岡市歯科医師会に移動することになりました。これを機会にこの会史をつくらうということがさっぱりわかりませぬのでよろしくお願いします。

【川口】私もそんなに古くからのことを知っている訳ではありませんが、できるだけお手伝いしたいと思えます。

——早速ですが、先生の御開業は何年頃だったでしょうか。

【川口】昭和二十二年で、新しい歯科医師会ができてからです。

——その頃は岩手郡と紫波郡が一緒だと聞いておりましたが。

【川口】いいえ、別れてからです。歯科医師会が新しくなった時別れたわけですが、前は岩手紫波支部という名前前で、昭和二十二年迄続きました。

——先生の開業された頃の紫波郡の状況はいかがでしたでしょうか。

【川口】岩手郡と紫波郡が一同に合する機会はなかったですね。私の経歴をお話ししましょう。私は昭和十五年に松尾鉦山の病院へ来たんですよ。その病院の歯科には四人の先生がいたんです。岩手紫波支部との関わり合いは私はほとんどありませんでした。一番初めにお会いしたのは、飯島覚重郎先生でした。学校の検査をするから若い先生に手伝ってほしいといわれて引っぱられました。その時初めてお会いしましたので、その事は良く覚えていますよ。確か、赤石小学校だったと思います。当時私がまだ病院勤めをしていた頃ですから昭和十五年から二十三年の間です。昭和二十年から二十三年迄というのは混乱の時期で、歯科医師会も、何もなかった時代です。

もう一つ覚えてるのは高野先生が石鳥谷に開業する時に、同窓生（現在の東京医科歯科大）ですからみんなでお祝いに行っただけです。何処かの旅館の二階で駅長さんとか町長さんなどのお偉いさんがいらしていたのを見てびっくりしました。



お話し / 川口歯科 院長
川口喜三先生

[Profile]

川口喜三【かわぐち・きぞう】
大正5年12月2日生まれ。現在の東京医科歯科大学卒業後、昭和15年松尾鉦山病院に歯科医として勤務。昭和23年西根町平館に開業し昭和36年～48年まで岩手郡歯科医師会会長を歴任。長年に渡り歯科診療・地域保健事業などの携わり、厚生大臣表彰、日本歯科医師会会員有功賞など受賞。現在も岩手県・岩手郡歯科医師会の重鎮としてご活躍。

岩手郡の歯科医師会の初代の会長等を歴任され、
現在も重鎮として活躍。

先生に時間を頂戴し、戦前戦後の混乱期や、
発足当時の事等、昔話を語って頂きました。

「稗貫紫波歯科医師会の歴史を語る / 川口喜三先生と共に」より

歩みに
寄せて

川口喜三先生 と共に

D A T A

聞き手 佐藤先生と上村先生
(稗貫紫波歯科医師会)
平成4年6月21日 ホテル花城

——戦後の混乱期の事を教えて下さい。

【川口】二十年を過ぎて新しい歯科医師会ができるのと前後して、その頃、覚重郎先生が支部長をしておられたのですが、好摩に駒井先生という方がいて自宅が盛岡の城ヶ根町にあったのですが、そこを岩手紫波支部の事務所にしていたんですよ。当時、終戦直後で材料がありませんでしたので全部配給だったんですよ。その配給を分配するためにそこに集ったんですよ。そこに、いらした先生で、紫波の大崎先生と江刺先生、それに飯島先生は覚えていますよ。江刺先生は学校の検査にいつてもそのまま倒れたことですよ。

——配給はどんな具合でしたか。

【川口】自分の好きな物をもってゆき、欲しい物が重くなった時はくじ引きでした。材料屋さんが、より分けもってきてくれたんですよ。杉江という材料屋さんでした。

——高野先生はいかがでしたか。

【川口】高野先生は開業したあと軍隊にいったのだと思います。私は軍属だったのですがね。当時の歯科医は、

ほとんど軍属として兵役についたのですから準士官扱いでした。兵隊検査でいくと一兵卒として扱われるのですが、隊の中で歯科免許のあるものは優遇され、多くの人達がきつい演習をしている時に歯科治療をさせられていて、高野先生はそれをやっていた訳です。私の同僚の者でそれをやらないで胸を悪くして陸軍病院へ入院した者もいます。おそらく高野先生は開業なさってから軍隊に行く迄二年間があるはずですね。

——松尾鉦山ではいかがでしたか。

【川口】松尾鉦山では従業員と家族の治療に当たっていました。そこでは治療中心で、補綴だけは自由診療でした。硫黄鉦山でしたので唾液中の酸性度検査としてザンプリニー反応を用いて歯科雑誌に発表したこともあります。強酸のため潰瘍性口内炎が多かったですね。歯科といっても何でもやらされました。盲腸手術もやったり、義足を作らされたりもしました。外科の先生もいたのですがとても手が廻らんですよ。それで内科や小児科の先生に手伝えといっても、血を見るとびっくりかえってだめだったんですよ。それより歯科の先生たちは毎日抜いたり

切ったりしているんだから手伝えといわれたんですよ。今でいえば医師法違反ですよ。けどどしかたなかったんです。今ではPの型や型と仰々しくやってありますが、当時はノイマン手術をやっておりまして。それから根端切除は毎日やっておりまして。顎関節症みたいなものもありましてシーネなどをつくった事もありません。顎の変形などがあると学校に連絡して口腔外科の中村平蔵、大先生にきてもらって手術をしてもらったりもしました。そこにいた連中は皆、中村平蔵先生に鍛えられた連中ばかりでしたからね。

——先生が岩手にいらした頃の歯科医師は何人いたのでしょうか。

【川口】そうですね。百人もいなかったでしょうね。県の歯科医師会はありませんがとにかく盛岡でさえポツリポツリとしかいなかったんですよ。

——飯島一先生が昭和十八年に開業していますが。

【川口】飯島先生の父上の所にうかがった時には、一先生はまだ帰ってきてませんでした。あと、大崎先生とか江刺先生は知っています。江刺



厚生大臣表彰受賞祝賀会で喜びの挨拶をされる川口先生。

先生とは割合仲よくやっています。かなり体のがっちりした方でした。今いらつしやるのは奥様ですね。大崎先生はお嫁さんですね。

—昭和二十年頃石鳥谷で開業していた岡田三郎先生を御存知ですか。

【川口】盛岡の開運橋通りの岡田重治先生のお父さんですよ。

—浅理先生についてはいかがですか。

【川口】浅理先生が会長で、会長の所が歯科医師会兼事務局だったんですよ。そこで菊地萬之助先生と知り合っただんです。そこには関川幸一郎先生もいました。

—花巻はいかがですか。

【川口】昭和二十四、二十五年頃に花巻厚生病院に高野先生という方が勤務しておられたことを覚えています。その方は同窓で二回生、石鳥谷の高野先生は四回生だったと思います。夜は自宅で診療なさっていたことを覚えていますが。そして厚生病院をやめた時東京に引越したんです。

—当時厚生病院に歯科があったんですか。

【川口】そうです。その先生が来てきてたんです。

—学生時代岩手出身の方を覚えていませんか。

【川口】石川悟朗先生はよく知っていますよ。

—医科歯科大で歯学部長をなさっていた先生ですね。

【川口】そうです。彼は前に「村山」という名前でした。盛岡出身です。彼の父親が松尾鉱山の重役で所長をやっていたんです。その関係で私達が松尾に引っぱられたんですよ。「いつ迄も軍属なんかやっているところ引っぱられて死ぬんだから、こつちにくれば絶対引っぱられないから。」という訳です。特に悟朗さんとは学生の頃からのおつきあいで、あいつはいつも家を出る時一円もらってくるんですよ。

—当時の一円は相当価値があったんでしょうね。

【川口】ええ、あいつの懐を当てに

数寄屋橋のビアホールに行つて飲んだものですよ。それがいつのまにかあんなに偉くなつてね。それから岩手医大の上野教授が私が松尾にいた時の小児科の先生の息子なんですよ。私がいた頃、彼は小学校の五、六年でした。だから最初来た時はびっくりしましたよ。「お前さんあの時の子供かい！」

—先生の開業当時、都南村あたりには開業医はいましたか。

【川口】都南ですか。都南には誰もいませんでしたよ。仙北町に藤村先生だけいましたね。離れているけど一枚橋に鎌田先生という方がいました。彼とは中央医療協議会で初めて医療機関実態調査をした時、その相談員というのをやらされたんですよ。つまり当たった人の相談に応じて報告書を書いてくれという訳です。その時に鎌田先生と知り合っただんです。それで初めて税金の勉強を始めたんですよ。税金のことを勉強しなければとても相談員は務まらないと思つたものです。私から税金をとつたら何にも残りませんよ。

—話がお得意の分野になってしまいい、まだまだお聞きしたいことが



ビアパーティーで若手の歯科医師等と談笑される川口先生。

たくさんあるのですが、日を改めて又ということにしたいと思えます。本日は貴重な時間を割いて頂きまして本当にありがとうございます。お体に気をつけられてますます御活躍の程、御期待申し上げます。

【川口】ありがとうございます。それはこれから高野先生の御見舞いに参ります。

「稗叢紫波歯科医師会史（一九九三年）より

これからの 歯科医業

「会誌 いわ齒」
1986年10月 No.60

昭和四十八年の石油ショック以来日本の経済界は大きな影響を受け苛烈な変化をきたしたが同時に歯科医業にも重大な課題をなげかけたことは当然なことであろう。以後社会情勢の変革、保険診療の問題、開業歯科医の増加等、内部事情の推移によって歯科医院経営も倒産を余儀なくされる程過酷な様相を呈し始めてきている。

医は仁術、医療は患者のためにあると言ふ論議は至極あたりまえのことであるが、歯科医業も適正な報酬を目的として医療を通して行う経済活動である。このことを忘れては歯科医療を遂行することはできない。

歯科医院経営の最大の目的は歯科医業を通して、すべての国民にその貧富の差にかかわらず公平に医療の恩恵を与え、国民の幸福を達成すると

ころにある。然しながら患者にはそれぞれの考え、希望、欲望があるから一面これに対応してあげることも必要である。

歯科医院の経営も時の流れに順応して行われなければ経営の質的向上も、歯科医業を通して国民の幸福を達成することも困難となる。将来の見通しをつけ、どんな技術革新が行われるか、地域行政の中で自分の医院がどの様な姿に変わっていくかをはつきりつかんでおくことである。医療技術の研鑽は言うまでもなく一番大事なことであるが、第一線の開業歯科医である以上は多種多様な期待をいだいている全ての患者のための技術も身につけておく必要がある。

従ってこれからの歯科医業は経営のトップである院長自らが人格の向上、技術の研鑽、社会性、積極的に経営信念をもつことが強く要求されることになる。そのいずれが欠けてもその歯科医院は早晚不振の一途をたどることになるかもしれない。

文 稿 寄 誌 会



川口喜三先生の

岩手県歯科医師会会誌「いわ齒」に掲載された、川口喜三先生の寄稿文をご紹介します。

巻 頭 言

「会誌 いわ齒」
1986年10月 No.81

歯科医師会の中での役目から、種々な会議に出席する機会が多いのですが、その度に思うことは、全会員参加が立て前であるのに、欠席者が意外と多いことです。欠席の理由はいろいろあるでしょうが、いつも同じ方が欠席されているようです。その会合や会議がまるで意味のないものなら、それも致し方ないのですが、今後の歯科医師会の活動方針、活動計画等の重要な議題の時ぐらには出席していただきたいものです。私も時々欠席することがありますが、あまり大きなことは言えないのですが……

先の衆議院議員選挙においての会員各位の協力は全国でも四位というランクづけでした。その成績が示すとおり、各地区歯科医師会におけるまことまじりばすばらしいのですが、県歯科医師会の総会などへの出席はまことにさみしいかぎりです。

県歯科医師会に対し不満が全く無いのなら良いのですが、陰で不満を漏らすのは、あまり感心したことはないと思います。少なくとも、身近な諸問題を率直に発言し、会長先生ないしは代議員の先生を通じて、地区の意見として県歯科医師会に対し、発言していただくことが県歯科医師会をより良い方向へむかわせることになるのではないのでしょうか。

若い先生方の中には、発言することにより、自分の立場が悪くなるのではないかと心配する先生もいらつしやるようです。我々全員の県歯科医師会ではありませんか。参加することにより、現在我々がどのような環境下で、歯科診療を行っているのか、そして、今後どうすればより良い歯科医療の環境を作ることができるのか、少しずつながら理解できることと思えます。

我々全員の歯科医師会であり、全員が会の運営に参加するのだという気持ちは持って、まずはいろいろな会合に出席してみようではありませんか。

歩みに寄せて

川口喜三先生と共に

——昔、岩手郡で開業なされた先生方にはどんな方がいらっしやうたでしょうか？

【川口】私が知る限りでは、生内先生、篠村先生、大崎先生そして好摩の駒井先生といった方々でしょうか。

【鈴木】県歯にはそうした資料はないのでしょうか。

——詳しいものはないようです。

【川口】当時は岩手郡と紫波郡で一つで支部になっていました。岩手郡が独立してからの最初の会長はここにおられる小林先生でしたね。

【小林】その通り。当時は会長という役職名はなく、支部長でした。昭和三十年頃は出席が少なかった。健康保険はわずか。

【三宅】小林先生から川口先生に引き継がれたのは、昭和三十六年頃です。昭和四十八年までおやりになったはずです。

【川口】その当時の県の会長はどなたでしたでしょうか？

【三宅】最初、浅理先生、次は花巻の今野先生、それから岩泉先生、平井先生そして林先生だったでしょうか。

【川口】昔、飯島先生に学校の検診があるから手伝いに来いといわれ召集

されたことがある。

——岩手郡歯科医師会の成立、現在までの推移をお話していただけますか？

【小林】岩手郡としては昭和二十三年頃ではないでしょうか？そのとき、紫波郡と分かれたと思いますが。

【川口】小林先生は大正のお生まれですか？

【小林】いやいや明治です。四十三年です。今はグラントシニアーでやっております。いつでも気持ちは青年です(笑)。

——岩手郡で一番最初に開業なされた先生はどなたでしょうか？

【川口】駒井先生ですね。お住いは盛岡でそこからお通いだったと思います。その当時は紫波郡と一緒に駒井先生が支部長をなさっていました。駒井先生の所で配給がありました。当時は歯科材料まで配給だったんです。

【小林】材料の配給の主なもの金はです。使用した金を逐次報告するんです。今でもその当時の帳面を持っていますよ。

【宮田】金だけではありません。燃料アルコール、印象材も配給ですよ。



座談会出席者

【コメント】

川口先生 三宅先生
宮田先生 小林先生

【司会】

篠村和雄

【助言】

鈴木哲男 渡辺充泰
三浦幹也 宮田左京

会報 いわ歯 1988年 No.90

岩手郡歯科医師会には公的な資料が残っておりません。そこで、先輩の先生方にお集まり頂き、座談会形式で岩手郡歯科医師会の昔を語って頂きました。

座談会

【1】

岩手郡歯科医師会

よもやま話

歩みに
寄せて

【三宅】当時の印象材というところ、デリングコンパウンドでしたかな？ 小林先生が会長になられた時期は開業何年目位でした？

【小林】七年目位じゃないですか？

【宮田】葛巻はその当時は岩手郡歯科医師会に入っていましたか？

【川口】いや、紫波郡から独立した時から入ってないようですよ。

【三宅】小林先生が会長をなさっておられた当時には岩手町にはどなたが開業されていました？

【宮田】私と小林先生。昭和三十年の町村合併以前には沼宮内にも吉田さんと言つた所に二人の先生がおりました。それに、一方井に田村先生という方がおりました。

【川口】私が岩手県に来たのは松尾鉦山にきてからですので、昭和十六年頃です。

【小林】昭和二十年頃の歯科医師会は情報交換の場でもあったようですよ。

——昭和三十年の町村合併以前の岩手郡の歯科はどのようになつていたのでしょつつか？

【川口】宮田先生と小林先生のお二人、あと三宅先生は昭和二十九年に開業なさいましたね。西根は私と大岩先生。

【小林】雲石は生内先生と篠村先生がおりました。

【宮田】雲石といえば、雲石の大火はいつでしたしょつつか？

——昭和二十六年です。

【宮田】小林先生が会長の時ですね。先生と私が一緒に火事見舞いに行つたんです。雲石駅前には全部焼けて、何もなくて鶯宿温泉の「長栄館」にバスで行つてご馳走になつたのをおぼえています。

【三宅】村木先生は最初繋で開業してまして、そのときは村上という姓でしたね。

【川口】好摩の駅前に馬場先生という方がいらつしたのですが、あまり長くはいなかつたようですよ。

【鈴木】開業当時、先生方は一日何人位の患者さんを診てらしたんですか？

【川口】そんな多くなかつたな。健康保険制度がない時代だから、五、六人位かな？

【鈴木】保険導入の後ですか？患者数の急増は？

【川口】そうですね。何しろそれまではかなりの高額の治療費だったのが、保険導入で負担が少なくなつた訳ですから。

【小林】抜歯とか充填は早くから保険

の摘要がありました。が、補綴は後から保険が導入されましたから、お金を用意してから来院というのが一般的でした。

【鈴木】当時の入れ歯はどの位の値段だったんでしょつつか？

【川口】米一俵といったものです。

【鈴木】六十キログラムですね？

【三浦】今の金銭感覚にしたらどのくらいでしょつつか？

【川口】だいたい三十万円くらいでしょつつか？

【三浦】当時の公務員の初任給はどのくらいでしょつつか？

【川口】東京帝国大学を出て八十円。専門学校出て五十円位というところでしょうつつか？

【小林】各々の先生がまちまちの料金だったので、会合をもつて何度も協議したものです。

【鈴木】目安料金を決めましたね。

【川口】初診から終わるまでが米一俵というわけですよ。私が松尾鉦山を辞めたときの最後の月給が千二百円でした(笑)。

【鈴木】当時のユニット一台の値段がどの位だったんでしょつつか？

【三宅】全部で十五万円位で買えたと思う。

【鈴木】今だと千五百万円でも全部は買えませんね。

【三宅】昔はコンプレッサーも外がガラス張りの中でベルトが回転しているのが見えたんですよ。

【宮田】つるつるしてね。

【鈴木】歯を削るには何で？やはり、足踏み式と電気エンジンですか？

【小林】そんなものみないですよ。戦争でみんなつぶれちゃった。宮田先生の所にエンジンや椅子など余計にあつてそれをお借りしました。当時の最先端の電気エンジンがありました。

【三宅】昭和二十三年の開業前に一年間勤めましたが、その時足踏みエンジンを使つたことがあります。

【宮田】停電があれば電気エンジンは使えない。この時は休診です。あの頃はしょつちゅう停電がありましたね。発電所の規模が小さくて、電気を充分供給できなかったんでしょつつか。タービンも最初はオイルタービンっていうやつで、オイルの臭いがきつくて、口中が油だらけになつたり(笑)。

【川口】では、そろそろこのへんで。

【小林】最後に一言。患者の歯科医に通う気持ちはどういふものであつたかという事です。終戦直後と十年後、二十年後はどうであつたか？又、今日ではどうですか？患者はどんな気持ちを持って通つてくるのか、こつこつ事にもつともつと関心を持ってもらいたいものです。

日中友好 日本歯科医師会 訪中団に参加して

団長は日本歯科医師会副会長長矢吹水男、顧問・東京都歯科医師会長佐藤精を主体として、去る六月十九日午前九時半成田空港を出航し途中大阪に寄航して上海に到着したのは午後四時過ぎでした。

今回の訪中は日中友好親善は勿論のこと更に、中国の針麻酔による外科手術の効率等中国医学独特な医療の実態を見聞し併せて今後両国間の医療技術の交流を図ることなど、まことに責任ある訪中団の使命でもありました。

針麻酔による抜歯や甲状腺耳下腺炎の手術等は、まことに容易に施行されているのです。この針麻酔について中国担当者の言によればその利点として、

一、薬物麻酔にくらべて安全で薬中毒の心配がない。

二、実施方法はまことに容易で農山村僻地でも手術が出来る。(はだしの医者も施行している)

三、手術後の不快感は残らず生理的機能は総て正常で副作用も併発症も

ない。

四、手術中患者の意識がはっきりしているから医患協力が出来ることなど多くの利点があるが、ただ欠点というよりむしろ問題として患者の恐怖感で手術中気分が悪くなった場合の処理については今後の研究に待つ。ということでした。針麻酔による手術の五、六例を見て廻りましたが、いずれも患者と術者が一体となつて行なわれ真剣なうちにゆとりある簡素感が伺えるのでした。

思いますに、中国の医療ははだしの医者が尖兵となつて職場や小地域に於て健康指導や医療活動を活発に行ない不健康な人をなくそうと努めているのです。もし彼等の手におえない病人はただちに上位の医療機関に送り最善の医療をこうじているのです。即ち人民のための充実した総合医療体系であると見てまいりました。

日本の医療は医療を主体に発展した個々専門医療機関でありますので現在のようない自由主義制度下に於ける自由診療機関に統制的国民皆保険医療を国の医務行政が強制的に押し付けたのですからどうしてもなつけない。なつかない分野がいよいよ大きく現れ、抜本改正が叫ばれて十年余になります。がなんらなすところな

く従つて医療の矛盾はその度合をますます深めつつあります。にもかかわらず、臨床医療は常にフル活動し患者の要望に答えているのです。医者との精神的ふれあいは奇妙な感情がたまたま見受けられるのです。このことについて岩手日報社編の「病める医療」の著者の言葉にも「医者も人間であり体力に限度が

小林 清先生

紀
行
文



「日中友好日本歯科医師会訪中団」の一員として、岩手郡歯科医師会の小林清先生が参加された折りの話をお伺いしました。この歴史的な訪中に、小林先生が参加されたことは、私たちにとっても語り継がれる誇りとなっています。

歩みに
寄せて

旅行記

は何時になったら解消出来ることでしょうか。

今回の中国視察旅行は上海、長沙、桂林、広州と言った華南の旅でした。

旅行中主要の地で見受けられますのは故毛沢東主席の写真と並んで華国鋒主席の写真が公共施設や大きな駅頭には必ずと言っていい程高く掲げられています。また多くの人々の目にふれやすい場所には「農業は大？」「工業は大寒に」学べ、と横書きの大きな看板がよく目につくのでした。

工場や学校、或いは病院など見学の際、子供達の「ローリエホワンイン」(熱烈に歓迎する)の連呼や幼い手を差し延べて文化宮(小中学校生徒の学習塾)内を一巡してくれる積極的親和行動には強く胸を打たれる思いがいたしました。「偉大なる指導者」「英明なる指導者」毛主席の立像や看板が随所に見られる如く、中国人民の胸中には同志毛さんの教え(毛沢東語録)が強く刻み込まれている様に思われ心から敬服いたしました。

八億の人民が一体となって、無駄を排除し合理的な日常生活の中で生産に建設に励む姿は飛躍的総合指数の上昇となって明確に現れてくることでしょう。

蚊も蠅も泥棒も暴力も、そしてこ

みもない清掃された環境の中で老若男女を問わず総ての中国人の眼は輝き、さつそうと身軽に街を散歩する健康な人々の姿かつての非常時日本の姿に類似)は日夜国防と生産に努め、平和にして豊かな中国の建設と世界平和維持のため貢献する八億人民の決意の表われと深く信じてまいりました。

社会主義国家であるソ連と中国が国運を賭けて敵視対立すると言つこととはどうしても理解することが出来なかつたのですが、今回中国を訪問し中国の実態に触れ、或いはガイドの説明等を聞き、覇権主義に反対する社会主義国家中国に対し、ソ連は超大国社会主義国家として力により世界制覇を目差していることとで一九六八年にチェコを武力で制圧し

たことは、まさしく覇権帝国主義の実証であると言われているのです。

ソ連が日中平和友好条約締結に際し、覇権主義反対を条約に書き入れることはソ連敵視政策につながることは日本政府に対し横やりを入れ、強迫していることを知り、福田総理の決断を長びかしたことが、よく解る様な気が致します。此の度八月十二日日中平和友好条約が締結されたことは西国の善隣友好関係を一層深め、両国の発展とアジア太平洋地域の平和のため、まことに喜びに耐えませんが、

楽しかった懐しい中国を再び訪問出来る日が待たれます。



▶ コラム「会誌 いわ齒」1987年1月 No.86

小林先生による中国旅行体験記

岩手郡歯科医師会 篠村和雄先生

寒さもひとしお身にしみる“かん寒”の季節を迎えましたが、雪はこの原稿を書いている時にはまだ降っておりません。昨年(10月)にはもう雪が降り、11月には雪景色が見られたのですが、今年は暖冬のせい(?)か昨年より雪の便りがない為、なんとなしに寂しい11月という感じがします。しかしながら御所湖には白鳥の華麗な姿がみられ、八幡平のスキーの便りももう少しではないかと思われ、少しずつではありますが、本格的な冬が近いと感じるこの頃です。

さて、岩手郡歯科医師会の例会が去る9月26日(土)盛岡ロイヤルホテル向かい

「龍園」にて開催されました。いつも通り川口会長の挨拶の後、鈴木副会長の司会で岩手郡歯科医師会からの連絡、報告、各部からの報告並びに質疑応答があり、ひと通りの議事進行の後、小林先生による中国旅行体験記をお話いただきました。

小林先生の中国旅行は今回で4回目なそうなのですが、以下その要旨をつづつてみたいと思います。

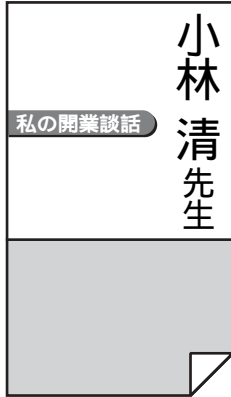
中国は日本の26倍位の広さである事、前回中国に行った時は政情は比較的穏やかで落ち着いていたそうです。ハリ麻酔の見学もしていた事、中国の物の値段が日本に比べると安いという事、資源が豊富で、又、中国人は世界中の人々の

為に一人一人が努力している事、それに国民としての目標をきちんと持っている事。中国の将来は期待していいと思われる。最近(資本主義もとり入れて、社会主義と共存させてうまくやっている。中国の歯科事情はあまりこまかい所まで見てこれなかったが、目についたのは、うがいコップがなく、日本でも昔あった水銃で口の中を洗うといった方式が今でもとり入れられているとの事でした。その他トイレが見るに耐えられなかった事、しかし中国人は物を大切にす国民で、日本人もそれをみならうべきではないかという意見を述べられて体験記を終えられました。

私の開業談話

草創期の先輩の開業談話から、昭和時代の歯科医の様子を垣間見てみましょう。

歩みに
寄せて



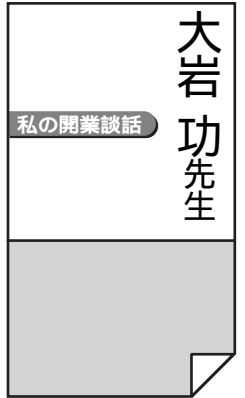
小林 清先生

私の開業談話

昭和十二年秋、東京都港区麻布三河台町十三番番地に出征軍医の跡を譲り受け開業しました。当時はまだ五・一五事件の傷跡も癒えぬ頃。更に新たな暗雲が低迷し、不況と失業と貧困は国民の気持ちを暗いものにしていました。

然し持てる者と持たざる者との格差(貧富)は誠に明確なものがあり、

大岩 功先生



私の開業談話

私は千葉生まれで大正十四年東京歯科卒業後、母校で二年間口腔外科に勤務。その後知人の招きで台湾台中市で開業。台湾時代は気候は暖かく果物等豊富で全く楽天地でした。ところが太平洋戦争のため日本人全員着のみのまま日本内地に引揚げねばならぬ運命

になり、また小さい子供達や妻を引きつれて郷里に帰りましたが家は焼かれ途方に暮れましたが、幸い兄貴の家に一家八人が厄介になり、開業するのに資金もなく本当に困りました。知人の歯科医が船橋市で開業しておりました。病氣入院のためその跡を病気が全快するまで小生が引受けてやる事になり、いくらからでも一家を支える事が出

来しました。

その後、縁あって只今の西根町に開業。当時は川口先生と小生だけでいそがしい毎日でした。町民も純朴で親切で気候もよし、ここを離れる事が出来なくなりました。

只今は若い先生が三人開業せられ賑やかになりました。

台湾で開業、縁あって西根へ。
純朴で気候もよい、
ここを離れることが出来なくなりました。

こうした世相の社会に於ける歯科診療内容にも色々な格差があり、差別もあって階級意識も強かったのです。従って一方では浪人医師もまた相当多数流れていました。

その頃の麻布区の歯科医師会は在っても名ばかりの様なもので、率直に云って歯科界の情報や懇親を図るための社交クラブの様なものでしたが、年毎に深まる不況と物資不足に統制が強化され歯科用資材も配給され

るようになってからは、歯科医師会の活動も活発になり、強化されて来ましたが、開業して丁度八年目の昭和二十年五月二十五日、アメリカの飛行機による最後の空襲で戦災にあい、先きに鉄道便で輸送した衣類その他全部が不明となり、全く着のみのままの姿で親子四人が生まれ故郷の岩手に戻って土着し、今日に至ったわけです。

思えば三十六年の年月は、日本の

経済は勿論、科学や技術の面でも経済大国として大きく成長し発展し続け、わが歯科界に於いても戦前とは比較することの出来ない程、技術的にも内容でもすばらしい飛躍をなしつつあることは誠に喜びに耐えないところです。

激動の昭和を乗り越えた郡歯科医師会の技術的、
内面的な飛躍と発展に何よりの喜びを感じます。

Sec. ③

岩手郡歯科医師会史

歩
み
を
進
っ
て

